NIOUNIOUS

PAIN

ANDREW

MILLER

アンドリュー・ミラー

器用な痛み

鴻巣友季子 訳

白水社

訳者略歴
英米文学翻訳家
お茶の水女子大学大学院修士課程英文学専攻
主要訳書
C・ノーデボーム『これから話す物語』(新潮社)
E・マクラッケン『ジャイアンツ・ハウス』(新潮社)
A・マクダーモット『チャーミング・ビリー』(早川書房)
S・マッケイ『燃える果樹園』(文春文庫)
T・H・クック『緋色の記憶』(文春文庫)

器用な痛み

二〇〇〇年五月二〇日 印刷
二〇〇〇年六月一〇日 発行

訳者 ©鴻巣友季子
発行者 川村雅之
印刷所 株式会社理想社
発行所 株式会社白水社
東京都千代田区神田小川町三の二四
電話 営業部〇三(三二九一)七八一一
編集部〇三(三二九一)七八二一
振替 〇〇一九〇-五-三三二二八
郵便番号一〇一-〇〇五二
http://www.hakusuisha.co.jp

松岳社青木製本

ISBN4-560-04692-1
Printed in Japan

Ⓡ〈日本複写権センター委託出版物〉
本書の全部または一部を無断で複写複製(コピー)することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター(03-3401-2382)にご連絡ください。

器用な痛み

INGENIOUS PAIN by Andrew Miller
©1997 by Andrew Miller
Japanese translation rights arranged with Sheil Land Associates Ltd., London through Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

家族に

それでも君は手に入れたと言うのか、
この人生に望むものを？
そうだとも。
それで、君の望むものとは何だったのだろう？
自分が愛されているとみなすこと、
自分がこの世にあって愛されていると感じること。

レイモンド・カーヴァー

第一部

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

一七七二年

1

空に横雲たなびく八月の暑いある日、デヴォン州はカウの村に遠からぬ館で、厩の前庭を三人の男たちが歩んでいく。やけに堅苦しいなりの一行である。年下と見えるふたりは、使者かはたまた番人のごとく、邸の主人に先んじておごそかに歩をすすめているが、いささか綾をつけていえば、黒外套を着た赤ら顔のあるじを、見えざる引き綱でしょっぴいているようにも見える。客人のひとりの手には革鞄が提げられ、厩へむかう歩みにつれ、金具の触れあうこもった音がする。

年かさの男はひと呼吸おいて扉を開けると、身ひとつ退き、客ふたりをなかへ通す。三人は暗闇のなかをゆっくりと動く。厩はきれいに掃き清められたようす。馬と干し草と、革と、糞の臭いにまじり、焼けたラベンダーの香りが漂っている。この夏季というのに、屍からは悪臭のひとつもしない。メアリという女、人肉をたもつ秘法まで知っているか、と邸の主たる牧師は思う。そのむかし、神々は英雄の屍を香料浸けにしてから葬儀をおこない、荼毘にふしたという。きっといまも、術はいろいろとあるのだろう。軟膏、まじない、その手の祈禱。メアリはテーブルの横で、乳搾り用の腰かけにすわっていた。三人が入ってくると立ちあがり、ずんぐりしてはいるが身ぎれいな姿をあらわす。羽根飾りのように、影をまとった女である。「さて、と」牧師はそう切りだし、「来ると言ってあったな。このおふたりが」と、年若い男たちを指す。「ロス医師とバーク医師だ。先生がた、こちらメアリと申します」

女が牧師の肩ごしに目をやったのは、バークの顔でもロスの顔でもなく、ロスが手に提げた鞄である。「先生がた」牧師は今度は声をひそめる。じつをいえば、メアリなど〝娘っ子〟呼ばわりしたいところ。

とはいえ、見た目からすれば年のころは自分より下であるのに、メアリという女、途方もない年寄りに思える。年寄りといって、ただの年寄りではない。何やら異なる時代から来たか、べつな種のもの、岩か神木の類かと思わせる。

メアリは厩舎を出ていくが、そのさまは静かと表するだけでは足りず、まるで音がせぬ。バークはロスと顔を見あわせ、声を出さずに「魔女」と口だけ動かす。ふたりはチョッキのボタンをなおすような振りで、そっと十字を切る。バークが言う。「そろそろ始めませんと、われわれ驟雨のなかを馬でもどることになりましょう。ランプはありませんか、司祭さま？」

遺体を移したときに運び入れたランプがあった。牧師は火口箱の燧石をチッチッと火打ち金に擦って火をつけると、それをロスに手わたす。ロスとバークが近づいていったテーブルの上には、毛織りの部屋着にすっぽり身をつつんだジェイムズが横たわっている。この牧師館にやってきた当初はおよそ真っ白であった髪も、ここ一年のあいだに黒さが戻ってきた。メアリはそれを洗髪して香油でなでつけ、きれいに梳って黒のリボンで結わえてあった。眠っているようには見えない。

「これはまた端正な骸」バークが言う。「ほう、まだ目鼻立ちがくっきりとしておられる」

ジェイムズの組んだ両手の下には、擦り傷だらけの革装本が一冊おかれている。バークはそれを奪うようにとりあげると、背表紙を一瞥してにやりと笑い、牧師の手にわたしてくるが、牧師のほうは何の本であるかとうに承知している。『ガリヴァー旅行記』。ほんの一、二週間まえ、ジェイムズが書斎から借りていった書である。それを誰がここにおいたか？　サム？　メアリ？　サムが欲しいというなら、くれてやろう。あの小僧は何がしか貰ってしかるべきだ。

ロスが亡骸から部屋着をはぎとって床に落とす。鞄からメスをとりだしてバークに手わたすと、バークは刃先にさっと目をやってうなずく。ジェイムズの顎に片手をかけるや、胸骨のてっぺんから恥毛のはえ

ぎわまで、ひと太刀に切り裂く。それから逆十字を描く形で、肋骨の下を横一文字に切る。メスの刃先はすっかり血濡れた。そこでひと息おくと、チョッキのポケットから眼鏡入れをとりだし、眼鏡をかけて目を瞬く。何やら小声でつぶやきながら、めくれた皮を脂ごと手で押さえ、ぐいとひっぺがす。そのあとはメスでもって、皮下組織からだましだまし切りはなす。バークの手は水夫のそれに似て筋骨たくましい。ロスがランプを高くかかげる。母屋からここへの道々、短い棒きれを拾ってきていた。それでもって、ジェイムズの臓物をつつく。

「もそっと仔細にご覧になりたいのでは、司祭さま？　そこからでは、何も見えませんでしょう」

牧師は長衣を擦りながら前へ出る。このバークという男、癪にさわる。

ロス医師が言う。「牧師どのは、〝家〟そのものより、そこに住む見えざる〝店子〟にご興味がある。ちがいますかな？」

レストレイド牧師は答える。「まさに仰せのとおり」

「いよいよ心の臓にまいりますぞ」バークが言う。

医師たちは手挽き鋸で肋骨を切り、さらにメスで大動脈をつぎつぎと断って、胸部を切りひらいていく。ふたりは見るからに嬉々として、顔は茹で卵のように上気している。この勿体つけた医学界、明知を誇る人々の集まりに、もうじき一編の論文がお目見えするのだ。「故ジェイムズ・ダイアの死因にかんする……二、三の考察、と言うところか。はかりしれぬ奇才についての……研究……二十何歳かまで……感じると言うことを……痛覚……と言うものを知らず……痛みの何たるかを……知らずにいた男。例証あり、図解あり、標本あり、あとは……」

牧師は顔をそむけ、おもての庭に目をやる。二羽の鳥が固まった厩肥をついばんでいる。その先の塀のむこうには、美女撫子が育ち、緑の扉が庭園の入口となっている。あの扉とジェイムズは切るに切れない。

あの扉から入って豆の観察をしていたジェイムズ。何をしていたか思いだせぬように、眉根をよせて庭園に立ちつくしていたジェイムズ。

ぬか土を長靴で踏むような音で、牧師はわれに返る。それはすでにロスの手にあった。筋を切り刻んだジェイムズ・ダイアの心臓。その心臓を見るロスときたら、むしゃぶりつきたいのをなけなしの羞恥心でどうにか堪えているという顔だ。そう牧師は思う。バークは布きれで手を拭くと、外套のポケットからたたんだ新聞紙をとりだす。それをひらくと、ジェイムズの腿の上に拡げ、ロスから心臓を受けとって新聞紙の上におく。「さしつかえなくば、司祭さま、これを……」と言いながら、もう心臓を紙でくるみ、鞄にしまいこんでいる。

「どうぞお持ちなさい、先生」心の臓も、死んでしまえば怖がりもすまい。ぞんぶんに検分させてやれ。また例によって、かつての診察のようすがよみがえる。ミリオナーヤの邸の部屋で、ジェイムズの体に屈みこむメアリ。女中のかたわらで身じろぎもできずにいる牧師の息の音に、あの女はさっと振りむく。だが、牧師は邪魔だてなどしない、できるわけがない、そう承知のうえで、女はジェイムズに目をもどす。痺れ薬のせいか、彼は眠っている。メアリはそのシャツのボタンをはずし、胸をあらわにする。窓の辺を照らすは小さな蠟燭ひとつとなれば、部屋はそうとうに暗い。それでも、牧師の目はしっかりととらえた。メアリの手。ジェイムズの体を傷つけたかに見えながら、ミルクの薄膜に指を浸けたごとく、跡ひとつのこしていない。

「司祭さま?」

「何か?」

「良いところを見そこないますぞ。さあ、胆嚢が出た」

「いや、失礼した。少しばかり……むかしを思いだしていたのだ。ダイア医師との思い出を。われわれ、

往時はともにロシアの旅を」

「お伺いましたとも。二度、三度と。司祭さまがダイア医師を想うのは理の当然。しかし追憶はおうおうにして人を感傷にひたらせ、感傷は……あなたのご職務では尊いものでしょうが、わたくしども医者には過ぎた贅沢だ。こうした亡骸をかつての……かつての知り合いとして見ることは禁物、あくまで学問探求の素材と見なさねばなりませぬ」

「言うなれば、肉の棺桶。それも、謎をはらんだ」ロスが嘴をつっこむ。その呼気はあきれたことに、これほどの匂いが入りまじるなかでさえ、まぎれもなくポルト酒と玉葱の臭いを発している。

牧師はふたりをつくづくと見る。すでに外套を脱ぎ腕まくりをした医師たちの姿は、セネカの不条理悲劇に登場する手合いを思わせる。ロスはバークからメスを受けとると、テーブルの向こうにまわってジェイムズの頭部に寄り、生え際に沿ってあっというまにぐるりと切れこみを入れ、牧師がその意図をのみこめぬうちに、頭蓋骨から頭皮をはぎとると、おぞましい血の塊と化した顔の上に、それをぽいと重ねた。酸っぱいものが、牧師の喉もとに熱くこみあげてくる。牧師はそれを飲みこむと、足早に厩を出て前庭を行き、緑の戸をくぐって庭園に入りこむ。そうして、後ろ手に扉を閉める。

目の前にひらけた土地はなめらかにのぼり、古い森の入口へとつづく。羊たちが草をはみ、涼やかな森のはずれを童がひとり歩んでいく。気分が気分だけに、牧師には、そんな光景すらお目出度いまやかしに思えるが、気持ちはなごむ。イタリアの僧たちは罪人の目の前に絵入りの小さな屏風をかかげ、近づく絞首台をかくしてやると言う。この景色はそれと似た役割のものか。しかし、どうしてまた、ロスとバークという二人の医者につけこまれたものやら。あれでも、ひと通りの名望と見識をもつれっきとした医者らしいが。牧師としても、ジェイムズの亡骸から、その人生の謎を解く鍵が得られるのではと、興味が湧いたのは事実である。とはいえ、頭に描いていたのは、もっとこぎれいな、丁重な仕事であった。なのに、

どうだ、大切な友を気のふれた屠畜人の手にわたすことになってしまった。じきにメアリが目にしようものならどうなる？　あの女、いまごろ家で何をしているのか。常日頃、何をして過ごしているやらわからぬ女だ。ほかの使用人たちも、初めこそ恐れていたが、いまではメアリを仲間にもって鼻を高くしている。彼女は人々の痛みを癒す。頭痛に苦しむ者あれば、その顔に触れるだけで痛みを和らげる力をもっていた。

庭園の戸が蝶番の音をたてる。牧師は振りむく。天気占いの石の下、メアリが木箱を差しだす格好で立っている。ちょうど考えていたのを嗅ぎつけるようにあらわれるとは、気味のわるい。しかも、こちらの指には血がついている。牧師は腕を後ろに組んで、たずねる。「どうした、何かあったか？」

メアリは箱の掛け金をはずすと、蓋をひらく。牧師は言う。「そういえば、その仕掛物があったな」牧師としては、気に入りの品である。ジェイムズがサンクトペテルブルクで行方をくらましたときも、のこった手荷物とともに持ちかえってきた。死んだものと思われたからだ。

「頂戴しておきなさい、メアリ」

メアリは牧師の顔をしばし見つめてゆっくりとうなずき、箱の蓋を閉めると、また母屋へ帰っていく。鋸を挽く小さな音がする。その音がやむと、牧師は厩へもどっていくが、心中、早いところ終わらせて、バークとロスを追いかえしたい一心である。やつら、邸へはあがらせまい。水が要るなら、雨受けの樽から手桶で汲んでくればよい。手は庭でも洗える。ジェイムズの遺体はなるたけ丁寧に継ぎあわせてもらおうではないか――破壊者ども！　キリックがすぐにも棺におさめるだろう。あすの午には埋葬だ。いまごろはもう、メイキン家の果樹園との塀ぎわに、クラークが墓を掘っているはず。

「何か見つけられたか、先生がた？　何がしかは？」牧師は声に軽蔑をこめようとしたが、たいした凄みもでない。どことなく拗ねているぐらいの声である。

バークが顔をあげてくる。テーブルの隅に置かれた手桶の縁に、十匹ほどの蠅がうるさくたかり、テー

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo